

## 『ペンブルック伯爵夫人のアルカディア』書評

A Translation of Virginia Woolf's "The Countess of Pembroke's Arcadia"  
from *The Common Reader*. Second Series(1932)

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

(和歌山大学教育学部英語教室)

2012年10月5日受理

今のこの瞬間、そしてこの時代の浅ましき、むさくるしさから逃れるために書かれた本がほんとうに目の前にあるというのなら、それ相応の気分を読者も味わったことがあるからにはほかならない。ブラインドを下ろし、ドアを閉める。これで通りの音は聞こえないし、街灯がぎらついたり、ちらついたりすることもない。それが読者の望みだ。そうすると、重みで棚の底まで沈み込みそうな、たとえば『ペンブルック伯爵夫人のアルカディア』のような分厚い本を見ても、魅力的に見えてくる。今この瞬間がすべてだなんて思いたくはない。革表紙をなでているうちに縁がすり減って丸くなり、ページをめくれば、黄色くなって、端も折れる。ほかのひとたちもまた同じ本をこれまで手に取ったのだと思う。『アルカディア』のこの現物を、それぞれの読み方で読んできた昔の読者たち、どんな風に読んだのだろうと想像することもまた楽しい。エリザベス朝の栄華を見ながら読んだりチャード・ポーター、王政復古の放縦な雰囲気の中で読んだルーシー・バクスター、18世紀がようやく幕開けした時代、華麗に直立した、自分の個性的署名を施して読んだトマス・ヘイク。まだまだ読む人がいたのだ。その時代時代の洞察力と不分明はあるものの、それぞれがそれぞれの読み方で読んだ。わたしの読み方もまた同様に偏ったものになるだろう。1930年に読むのでは、1655年では当たり前だった多くのことを理解できない。18世紀に見落としたことがわたしたちには見えることもある。でもこれまでのいくつもの時代の読者と、まずは同じことをやってみることにしよう。つまりわたしたちの時代の洞察と不分明という銃弾を、『ペンブルック伯爵夫人のアルカディア』に浴びせることにしよう。そうして後の時代の読者に伝えていくのだ。

現実から逃れたいということで『アルカディア』を選ぶとすると、シドニィはまさにその目的で書いたのだというのが最初の印象である：大切な妹、ペンブルック伯爵夫人に「ただおまえに、おまえのために書いたのだよ。」シドニィは今いるこのウィルトン邸の中にあるものを見ているわけではない。自分の悩みとかロ

ンドンにいる、激しいかんしゃく持ちの女王のことを考えていたわけでもない。目の前のこと、その葛藤から逃れようとしているのだ。「世間の厳しい目」ではなく、自分の妹を本当に楽しませようと書いているのだ。「たいていはおまえの目の前で、できる限り早く書いて、残りは人手を介して送り、綴じもせずには渡したが、どんな風に書いたかはおまえが一番よく知っている。」丘陵下のウィルトン邸で、ペンブルック伯爵夫人と腰を下ろし、アルカディアとひそかに名をつけたきれいな地所を遠くに見つめている。そこはきれいな谷、豊かな放牧地の地所だ。邸宅は「黄色石で星形に建てられた屋敷」だ。偉大な世継ぎも住んでいれば、つましい羊飼いたちもいる。地上のつとめは恋をすること、冒険に出ること。バラの花で彩られた野原で水浴びをする少女たちをびっくりさせるのは熊やライオン。姪たちは羊飼いの小屋に閉じ込められる。いつだって変装が必要だ。羊飼いは本当はお世継ぎだったり、女と見えて、男だったり。つまりなんでもが、1580年の現実のイングランドで、あったこと、起きたこと、そういうことを除いて、なんでも起きる可能性があるのだ。この夢に満ちあふれたページを妹に渡したとき、できの良さはともかく、楽しんでくれよとシドニィが言いながら、ほほえんだ理由がわかるのだ。「では時間のあるときに読んでくれ。おまえの判断力でおかしなところがあっても責めないで、笑ってくれ。」シドニィ兄妹、またペンブルック家のものたちの、実際の生活は全く異なっていたろう。それでもわたしたちが作り出す生活、物語のお話しには、半ば目を閉じて椅子にもたれ、野放図に夢を注ぎ込めば、たぶんなんらかの荒削りな美しさというものが備わることだろう。こころの奥ひそかに望んでいるものをゆがんだ、あるいはなにか衣装を着せたイメージにして、そういうお話しの中に表すということは良くあることだ。こうして『アルカディア』は現実との関わりを意図的に鼻であしらい、またべつの現実を描き出した。友人たちは、作者が作者なんだからということで、気に入ってくれるとシドニィが匂わせたとき、その意味はおそらく、友人

たちであれば、ほかの様式ではシドニイが口にしないことを『アルカディア』のなかに見つけてくれると期待したということだ。羊飼いたちは川岸で歌を歌い、「時には喜び、時には悲嘆、ときにはそれぞれ描き出すのも難しい事柄を声に出し、それから時には意味深なやり方で、というもほかのやり方ではとても扱いきれないから、そうした事柄を口にする」。こころのうちのそういったことを『アルカディア』という衣をかぶせて、見せかけのうちにひそかに語ろうとしているのかもしれない。でも物語の初めのページをめくるとき、新しいものに触れる気分の中に、その見せかけがなるほど読者を引きつけるのである。「キテラ島を眺める」春の砂浜に自分が羊飼いと一緒にいる気がする。すると、ほら、なにかが海の上を浮かんでやってくる。男の身体だ。胸に小さな箱を抱いている。若く美しい。「裸ではあっても、その裸体こそがその若者の服なのだ。」そしてその名はミュージドラス。友人たちは亡くなってしまった。美しく歌を歌って、羊飼いは若者を生き返らせる。帆船に乗せ、公子パイロクリーズを捜してその港から漕ぎ出す。すると海の色が変わる。閃光がきらめき、煙が上がる。というも二人の王子、ミュージドラスとパイロクリーズを乗せた船に火がついてしまったのだ。船は海上で燃え立ち、まわりにはいろいろな金銀財宝がまき散らされ、漂う。それから船乗りたちの遺体も浮かんでいる。「要するに、敗北。勝者が戦場を支配し、略奪するのだ。嵐もないのに、暗礁に乗り上げたわけでもないのに、船は難破する。そして海の真ん中で炎となって消えるのだ。」

この『アルカディア』という広大なつづれ織りを織りなす要素のいくつかについて、この限られた紙面に書き込もう。場面の美しさ、まるで絵画のような静寂、見る者に迫ってくるなにかの強さ、荒々しいのではなく、羊飼いの歌声に合わせ、ゆっくりとしていてそしてやさしい力。時にはこうした一節は耳に残って繰り返されることになる。「そして海の真ん中で炎となって消えるのだ」。「皆の顔にはこれから起こることを予感する哀しみが浮かんでいた。」そうしてささやき声は大きくなり、広がり、そしてついにはさらに練り上げた表現となる：「羊たちを育ててきた牧草地、そこでは羊たちがゆったりとした時間のなかで草を食んでいる。かわいい子羊たちはかわいい祈りの声を上げ、母羊の乳を求める。羊飼いの息子が呼び子を吹く、まるで歳を重ねることはないみたいだ。若い娘は編み物をしている。そうして歌を歌う。歌声が娘の手をなでるようだ。その両手は歌の音に合わせ動いている」このあたりの節はドロシー・オズボーン(訳注：Sir William Templeの妻(1627-1695)。“Perfect Letter Writer” [1934]とも呼ばれる)の手紙の有名な一節を思い起こさせる。

場面の美しさ、動きの重厚さ、奏でられる音の美しさ。これらは喜びを喜びとして求めるのであれば、き

っと与えられる褒美だ。ほかに表現しようのないこの美しい風景を曲がりくねって伸びてゆく小道に沿ってゆくとき、読者はお話しに引き込まれてしまう。というの見通すさきには、さまよい歩くときの喜び以外なにもないところへと、シドニイは読者を連れて行くのだ。単語の音節でさえこころはずむ喜びを作者にもたらしている。なめらかに流れる強弱のリズムに溢れた文章の背に読者が乗りまたがるときに感ずるリズムでさえ、作者を有頂天に喜ばせる。ことばはことばだけでシドニイが喜ぶものなのだ。ほら、きらめくことばを手のひらいっぱいすくい上げ、シドニイが声を上げ、泣いているようだ。求めるだけで、そんなにたくさん美しい言葉がそのあたりにごろごろと転がっているなんてありうるだろうか。では、気前よく、ふんだんに使おうではないか。そうしてシドニイは言葉を豊かに使うことを楽しんでいる。子羊は乳を吸うのではない；「子羊たちはかわいい祈りの声を上げ、母羊の乳を求める」のだ。少女は服を脱ぎはしない；「装いの覆いを取り去る」のだ。木は川の水面に姿を映しはしない；「その子は川の中をのぞき込み、流れる川に緑の巻き毛の手入れをした。」もちろんばかばかしいことだ。しかしペンで描かれるこうしたイメージから得られる喜びと驚きとでこのような文章を書いていくことと、もっと後の時代の書き物、つまりことば自体から潤いが消えてしまったものとの間には異質な世界が横たわっている。形式を重んじる後の時代であれば、機械的に対照法を用いたりする文章、シドニイはそうした文章に動きや震えを付け足して、微かな動きを付け加える。

そして若者は美しいけれど、激しやすく、いまわの際にあるのに麗しく、崩れ落ちる脚を支えきれず、地上に崩れ落ちた。怒りで泥を食み、自分の運命を呪った。そしてできうる限り死にあらがった。死もまたそうはしたくなかったのかもしれないが。そうして長いこと自分の若い命が消えるまで苦しんでいた。

シドニイのこの物語の広大なページを斬新なものにしているのはこうした起伏、しなやかさなのだ。ときには声を出して笑いながら、ときにはそうじゃないだろうと思ひながら、どんどん読み進んでいくとたびたび、理性の耳を全部ふさぎたいとか、寝転がって、形をなさない音の連なりに耳を傾けたいくなるのだ。たとえばまだみんなが目を覚ます前に家の周りできさずる鳥のように、狂ったように声を上げる、このうっとりとなった声の合唱に耳を傾けたいくなるのだ。

しかし読者が喜ぶ部分を強調することはたやすい。なぜならそれらは消えていくものだからだ。シドニイが『アルカディア』を書いたのは、ひとつには暇つぶしだったろうが、もうひとつには物書きとしての練習、それから英語という新しい道具としての言語の実験だ

ったろう。でもたとえそうだとすると、『アルカディア』を書いたのは若いときだし、またシドニィは男だ。だからアルカディアの道には轍がある。馬車はひっくり返る。女たちの肩はむき出しになる。ミュージドラス王子、パイロクリーズ王子にも情熱というものがある。パメラもフィロクリアも海の色のサテン、それから真珠を通したレースで飾り立ててはいても、女であり、恋もするかもしれない。こうして流暢であってもよどみなくとはいかない場面で、読者は足踏みしてしまう。それから、これはほかの小説家も同じことだが、実際の男あるいは女だったら、この状況ではどんなことを言うんだらうと、あるいは自分の感情を爆発させるのはどこがいいかと、風景にはそぐわない光を当てて、ぼんやりと見える田園の風景をどこで輝かせるかとか、シドニィが考え込んでペンを止める場合もある。しばらくはびっくりするようなその組み合わせに遭遇するのだ。ぎらつく太陽が銀の燭台のろうそくを照らすこともある。羊飼いと姫が小鳥のさえずりのような声を急に止めて、人間の声で熱心に二言、三言早口で喋ることもある。

…何度も、あの椰子の木にもたれ、この幸せを感じていた。こうしていればなんの痛みもなく愛は生まれてくるのだと。何度もご主人の飼っている牛の群れがやってきて、このすがすがしい草原で、食べたものを再度反芻するとき、若い雄牛が愛を目の前で証明してくれることがある。でもどうやるのだろうか。勝ち誇った顔それから喜びを示してそうするのだろうか。人間は、悲しいものだ。こう、そのときには独りごちたのだ。才覚、それは自分の幸福を司るものであるはずなのに、幸運をひっくり返してしまうものにもなる。こうした獣たちは自然の申し子のように自然がもたらす恵みを当たり前のように受け継いでいる。わたしたち人間はどこの馬の骨ともしれず、家を離れ、捨てられっ子にもなり、悲嘆と哀しみにもまれ育っていく。獣たちのところは身体に慰安を与えるのに躊躇はしない。相手を楽しませるといふ目的で、獣たちの意識は発せられるのだ。わたしたち人間は面子といった障害、良心という責めを身につけてしまっている。

こうしたことばは、ダンディで見た目を気にするミュージドラスの口から奇妙な調子で鳴り響く。ここには作者の隠れた怒りそれから苦しみが見られる。それから小説家(訳注:ウルフはあえてnovelistという言葉を使用している)としてのシドニィは突然王子の目を見開かせる。カニの形にはめ込まれた宝石が、「一方を向いていると思ったら、反対方向に行ってしまう」という理由で、モプサを愛していると見せてはいるが、王子のころは自分のものだとすることを象徴するものとして、パメラは宝石を理解しているのだと、ミュージドラスは見ている。そしてパメラが宝石を受け取るとき、ミュージドラスはこう言うのだ。

ひとつひとつのことばだのなんだのが転がり落ちていって、ぼうっと注意に欠けていても、(ちょうどそれはそのひとが使うことばで、なにがあるいはだれがじぶんのものかを見極めるようなもの)、どのような冷たい気性が何にもまして、自分にはひどいものなのかと。それは光り輝くパメラに自然と備わった威厳と混じり合って…

もしパメラが自分を軽蔑したら、嫌ったら、その方が良かったらう。

しかし彼女のこの残酷な落ち着き、わたしを嫌って姿を隠すわけでもなく、さりとして好意を進んで示すというわけでもなく、優美、ではあってもなにかしかの、あるひとつの様式に沿った優美さ、こうしたことを儀礼の中に刻み込んで、パメラがなすことはみな、周りのもののためというよりは貞節さを見せるためなのだ。この世のものとは思われないほどのパメラの美、そう呼ぼう、手を触れることもできないもの、その美に、説得の方法もわからずに、わたしは暴虐なる絶望に今この身を任せてしまおうとしているのだ。

—たしかに、鋭く切れた、男のこの観察。男はきっと自分が描き出したものを実際に経験したことがあるのだ。そして影薄くぼんやりとした登場人物、ガイネシア、フィロクリア、それからゼルメーンもまた生き生きと描き出されることになる。はっきりとは特徴のなかった顔が情熱をもって輝き出す。ガイネシアは、娘の恋人を自分が愛していることに気づき、泡が膨らむように大きく壮麗に描かれる。「ゼルメーンに向かって声の限りに叫び、助けを求め。ゼルメーン、私を憐れと思っておくれ。」そして年老いた王でさえ、初めて目にする美しいアマゾンの戦士を見て、年甲斐もなく恋の炎をともしられる。老齢の愚かさも顧みず、「自分の身体を不思議なものでも見るように見て、まるで体力はまだ劣ってはいないぞとでもいうように、ときには小さな歩幅でスキップを踏んで見せたりする。」

しかし物語の意味が現れてくる瞬間、その瞬間はもちろんしだいにその力を薄れさせ、王子たちはまたもとの姿に、羊飼いたちもまた笛の音を奏で始めるということにはなるのだが、その瞬間は物語全体におやっと思わせる光を投げかける。まずシドニィがどのような限界のなかで物語を書いていたのかが、読者にはもっとはっきりとわかってくる。しばらくの間、シドニィは現代の小説家と同じように鋭く正確にものごとを注視し、観察し、それを記録することができる。そして現代の読者の方を一瞥すると、なぜか別の方へと目を向けてしまうのだ。まるで自分を呼ぶ声が別の方向から聞こえてきたみたい。そしてその声の言うことを聞かなければならないかとでもいうように。シドニィが考える散文では、日々のおしゃべりで使用するありふれた言葉を使うことはできない。騎士物語のなか



では登場人物の王子や姫は普通の男や女が感じたり思ったりすることをやってはいけない。田舎ものの特徴はウィットだ。おもしろおかしく動き回る。自然なことばでおしゃべりする。デイムタスのように「口笛を鳴らし、十七頭の雄牛を太らせるのに、一年に乾し草を何山食べさせるかとか、指を折って数えることもできる。」でも高貴なひとたちのことばはつねに長く、抽象的で、比喻をまき散らしていないといけない。さらに、一点の曇りのない美德というものをもった英雄であるか、あるいはひとのところに触れても動じだにしない悪党でいなくてはならない。人間が持つ奇癖だの狭量だの、そんなものはみじんもない。散文はまた現実のものを前にして、そこから注意深く目をそらさなくてはならない。時には一時の間自然を目の前にして、その場面に合うことばを捜すことももちろんある。沼地からアオサギが飛び立つとき、「尾羽根を揺らす」のに目を留め、ウォータースパニエルが「優雅に鼻を鳴らして」カモを狩るのを見る。しかしこの具体的な描き方は自然や動物、また農民たちを描くときに使われるだけである。散文は落ち着いて、高尚である。一般的な感情、広大な風景を描くとき、どんな語り手によっても何ページにも渡ってよどみなく落ち着いた描写がなされるときに散文が使用されるようだ。一方、韻文は全く別の役割を持っている。面白いことにシドニイが物語のまとめにはいたいと思ったときに、力強い印象を与えたいとか、際だって明確な印象を記したいとかのために、韻文に向かう。『アルカディア』に使われる韻文は現代小説でいえば、対話のような機能を果たしている。単調さを打ち破り、焦点をたたき出す。パイロクリーズやミュージドラスの果てしない冒険を描き出すのにちりばめられた種々の歌を読むとき、わたしたちの興味がそのたびに燃え上がるということになる。しばしば韻文の具体的描写また力強さは物憂い散文の歩みの後でひとつの驚愕となって出現するのだ。

何のためにそのような気高き精霊がそのように暗い館に閉じ込められる必要があるのか。

それとも肉体に包まれてなにを得ようというのだ。

名前だけは壮麗な、人間という惨めな生き様か。

天体に放たれたボールのように、運命に支配された奴隷。

もともとの姿から変化して、地上というその檻が朽ちるのと同様に朽ちてゆく。

そこでは死は恐怖、生きていても苦痛だ。

汚物まみれの舞台上に立つ一群の役者と同様だ。

—ものぐさな王子や姫たちがこのような激しいことばを発していったいどうしようというのか。あるいはこういう台詞はどうだろう。

この肉体は…

恥辱の売り場、売り物にならない、インクの染みでいっぱい  
の書物、

この人間というもの、口ばかり動く獣、このでくの坊。

—このようにシドニイは自己満足の姿形を忌み嫌うかのように、物憂い者たちを描く。それでも詩人は仲間たちにやりたいようにさせるほかはない。というのも詩人シドニイが鋭い目を持っているということは明らかでも、—賢者らしく苦しみを味わっているミツバチたちの住み家を話題にする。そして他国で育ったイギリス人のように「羊飼いはどのように日々を過ごしているのか。岬の突端、暖かい暖炉、そうでなければ、船の上で過ごしている」ことも知っている。それでもシドニイはプランガスとエローナ、それからアンドロマナ女王、そしてアムフィアラスと母セクロピアの陰謀を、読者を考慮してのろのろと話す。登場人物は激しい生き方をしてはいるが、その陰謀や毒を盛ったりする話とは調和しないものの、エリザベス朝読者の耳が聞けば、甘ったるく、意味が不明で、冗長なところはまったくない。ただライオンがゼルメーンを脚でその朝、殴ったという事実だけ、物語を短くする可能性つまり、なくても良いかなと思わせ、クライウスの不平を聞くのはもっと後日の方が良い、言い換えれば順番を入れ替えた方が良いのではと思わせる。

その歌がずっと前から力なく小声になっているのに気づき、歌声の意味を知って、たいそう喜びはしたものの、すでに新しいことに取りかかっていたので、いつラモンが歌い終えるのかもわからなかったが、そのことにゼルメーンは喜んで賛同したのだった。それで四方からみんなは、兄のためには死をもいとわないうと、言うに至ったのであった。

そして物語は紆余曲折を経て、というより一連の物語が雪片のように積み重なってゆくといった方がいいだろうか、ひとつ終わると別の物語が出現し、読者はそのひとつひとつを追いかけていきたい気持ちに駆られるというわけだ。そのうちに眠気がまぶたを襲う。ときには夢見つつ、ときにはあくびをし、それでも兄王子が殺される場所を読みたいという気持ちになるのだ。では最初に現れたためくるめく自由の感じはどうなったのか。現実から逃れたいと思っているわたしたち読者は、それでは逆に捕らえられ、網の中に入れられたということになりはしないか。しかし妹を楽しませるための物語を語るのは、最初はいとも容易いものに思えただろう。この場所から、この時間から逃れ、リュートの調べとバラの香に溢れる世界を希望に燃え遣送するのはなんと気持ちの高ぶることだろう。でもああ、弱腰の気持ちがわたしたちの脚をそっと押しとどめる。いばらが服にまとわりつく。読者は易しい言

い回しを求めるようになる。優雅に装飾された文体、最初は魅力的であっても、うっとうしくなり、くすんでしまう。理由を見つけるのは簡単だ。高揚した気持ち、ことばとともに舞い上がり、シドニイのペンの運びは注意散漫なものになった。書き始めに自分がどこにたどり着くかなんて、思いもしなかった。シドニイは思ったのだ。物語を語る、それでいいのだ。ひとつの物語、つぎの物語と、果てしなく続けていけばいいのだ。しかし終わりの見えてこないところには、どちらへ向かうかという方向感覚はなくなってしまう。登場人物をたいした特徴付けもせずに良い人物悪い人物と分けることがシドニイの計画の一部だったので、結局は複雑な性格、多様さというものを手に入れることはできなかった。物語に変化と動きを付けるために、シドニイは変装という方法をとらざるを得なかった。服を着替える、王子を田舎ものに変装させる、あるいは男を女へと。これらは心理的な機微というより、とくに語るべきことが何もないひとたちの集まりをよどんだ空気から解放するための方策だ。しかし子供じみた仕掛けがその魅力を失ったとき、船の帆を膨らませるだけの息の力はもう残っていない。誰が喋るのか、誰に喋るのか、そして何の物語が進んでいるのか読者には判別できなくなる。このぶらぶら歩きのような物語のなかで、シドニイはコントロールをほとんど失い、途中で自分と登場人物との関係がわからなくなってしまったのだ。喋っている「わたし」は、作家なのか、その「わたし」は登場人物なのか。どのように洗練された文体でも、魅力がいかにあっても、読者と作家の結びつきが切れて、偽りのものになってしまうのは、読者のほうも、もう物語に夢中にはならない。そうして次第次第に『アルカディア』は面白いものなのか、面白くないものなのか判別のつかないところへと浮遊していくことになる。物語はみな忘れかけ、出かけるひともない冒険の地のひとつとなってしまう。そこでは崩れ落ちた彫像に草が覆い被さり、雨がしとしと降り注ぎ、大理石の階段は苔に被われ青くなり、花壇には雑草がぼうぼうと生い茂っている。それでも物語は時にはさすらってみることのできる美しい庭となることもある。ここかしこに花が咲き、ナイチンゲールはライラックの木でさえずる。

こうして読者は、シドニイが『アルカディア』を完成させようという試みを儂くもあきらめる直前に書いた最後のページにまでたどり着く。するとフォリオ版の『アルカディア』を書棚、それも一番下だ、に戻す前にふと思いつくことがある。『アルカディア』には、ちょうど光り輝く球体のように、英語で書かれた虚構物語の種というべきものが目に見えない形で潜んでいる。だから限りのない発展の可能性を認めることができる。たくさんいろいろな方向性が目の前にあって、そのどれを選んでも構わない。ギリシャと、それから

王子と王女に焦点を定めても良い。気高い物に気を付けなければ、『アルカディア』の威厳とでもいべきものを見つけるだろう。叙事詩の観点から、単純な話の流れ、とうとうと流れる大量の話、そして広大な風景描写にまとめ上げることもできる。あるいは目を近づけて、丁寧にそこに実際には何があるかを観察することもできる。ダルニータスとモプサを、あるいは卑しい生まれでぶっきらぼうな口の利き方しかしない一般の平民を主人公として取り上げることもある。さらには日々のわたしたちの生活を、普通に流れていく生活を取り上げる。あるいはそうした表面上の障害を払い落として、中にある実ることのない愛を胸に抱いている不幸な女の苦しみ、複雑なこころの内を、あるいは歳には合わない情熱で身を焦がしている老いぼれのばかばかしさをのぞき込んでも良い。あるいはひとの魂のうちの心の動き、そして冒険をその拠点とすることもできる。こうした可能性が『アルカディア』——つまりロマンスでもあり、写実の物語であり、詩であり心理の書である『アルカディア』には潜んでいるのである。しかし、若い世代が達成するには大きすぎる仕事を物語に持ち込みすぎたということ、そしてつぎの時代が引き受ける宿題を残してしまったのだということ、まるで知っているかのように、シドニイはペンを置き、しかも途中で、そしてこの壮大なもくろみ、ウィルトン邸の妹に話を語って聞かせることで、邸の日々をゆったり過ごすというもくろみを、美と不条理の中に未完成のまま残したのだ。